

ベルリンの旅

歴史への断章

山井敏章

「ベルリンは固有の姿にとどまることなく永遠の生成を運命づけられている都市である。」(カール・シュフラー, 1910年¹⁾)ベルリンを訪れる者は、ほぼ百年後の現在でもこの言葉が真であることをただちに実感するでしょう。かつての中心街のひとつポツダム広場ではいま、富士形の大きな屋根のあるソニーセンターを含む高層ビルが林立する傍らで、将来そこに立ち並ぶであろうビル群の基礎工事のために地面が深く掘り下げられ、巨大なクレーンや作業機の向こうに、19世紀かあるいは20世紀はじめのものと思しき建物^{おぼ}がいくつか老朽化した姿をさらしています。ここにはかつてベルリンを東西に分ける「壁」、そして二重の壁の間を走る回廊状の「死の空間」が走っていました。そこを越えて西側への逃亡を試み射殺された者は80人を数えます。最後の犠牲者は22歳の青年、1989年2月のことでした。1961年の夏に築かれた155 kmもの長い壁は1989年11月、市民によって砕かれて口を開き、翌年東西ドイツは統一します。以前、1994年夏から1年間ベルリンで暮らしたとき、ポツダム広場の一角には切断された壁の残骸が墓石のように並び、かつては東ドイツ兵が銃を構えてそこにいた監視塔が残っていました。それらはいま跡形もありません。

昨年(2002年)9月はじめ、7年ぶりにベルリンを訪ねました。研究会への参加が目的でしたが、数日間の滞在中、かつて暮らしたこの街のあちこちを急ぎ足でまわってみました。以前住んでいたのは旧東ドイツ側、巨大なコンクリートパネルを組み合わせて作ったプレハブ式10階建てのアパートで、築後20～30年を経てあちこちがたがたが来ていました。灰色の無機質な巨大なアパート群が道の両側に延々と続くその様は、暗い雲に閉ざされた寒風吹きすさぶ冬の空



ポツダム広場の壁の残骸 1994年



ポツダム広場 2002年

と一体になって、ベルリンという街についての私のイメージを重く規定しています。油の異臭の強くする暗い地下鉄 この鼻をつく異臭とそして乗客の不機嫌な顔も忘れられないベルリンの一部です から路面電車に乗り換えてかつての住まいの前に立つと、その外壁は淡い緑に塗り替えられていました。他のアパートもそれぞれ違う色に塗られています。内部も改装した、と人に聞きました。社会主義国家の画一的な平等観を象徴するような住環境を刷新して、東の住民の西に対するコンプレックスを和らげるために市当局がかなりの資金をつぎ込んだ

のではないかと想像します。しかし、直方体の巨大な箱が立ち並ぶ非人間的な空間構造は変えようもありません。

ベルリンでもっとも大きく変わった場所のひとつは戦前最大の繁華街、ヴィルヘルムシュトラッセ（ヴィルヘルム通り）でしょう。第二次大戦で徹底的に破壊され、以前住んでいた頃はまだ廃墟の臭いが支配していました。当時、地下鉄のヴィルヘルムシュトラッセ駅の出口付近でベトナム人が密輸タバコのカートンを売る姿をよく見かけたものです。彼らは通常2人一組で、1人がタバコを売るあいだもう1人は見張り役を務め、警官が近づくとすっと姿を消しました。彼らの背後にはマフィアのグループが存在し、マフィア間の抗争でベトナム人が何人か殺された、という事件もありました。ベトナム人はもともと東ド

イツ政府が労働力不足を補うために同じ社会主義国である北ベトナムから大量に「輸入」したものです。ベルリンのあちこちで見かけた彼らの疲れた顔を、今回見ることはありませんでした。彼らはどうしているのか。いずれにせよ、現在のヴィルヘルムシュトラッセはそうした暗い残像を一掃し、デパートや高級ブティックが立ち並ぶベルリンきっての繁華街の姿を取り戻しています。もっとも、日本人の私の目からすると、これではたんなる小銀座ではないか、と^{いささ}些か落胆を禁じえなかったのですが。

南北に走るヴィルヘルムシュトラッセの駅をはさんだ北側は開発に手がつけられたばかりで、ここには廃墟となった建物がまだいくつも残っています。そのひとつ、タヒエレスと呼ばれる爆撃の跡を残す建物は、廃墟の姿のまま補強して保存されることが決まったそうです。ここには自称芸術家たちが住みついて、外壁のひとつにはサイケデリックな絵が一面に描かれています。1階にあるちょっと危険な雰囲気をする喫茶店もそのままです。この建物はフリードリヒシュトラッセとオラーニエンブルガーシュトラッセとが交差する角にありますが、このオラーニエンブルク通りはベルリンの売春の中心地のひとつで、夕闇とともに多くの売春婦が姿を現したものです。今でもそうか、とドイツ人の友人に尋ねると、そうだ、と彼は答えました。「ベルリンの売春婦は約5,000人。その半分が外国人で、タイ人のほか、とくにロシア・東欧諸国の女性がますます増えている。もっとも、ドイツ人売春婦との競争はまだ問題になっていない。ベルリンの市場が飽和に達していないからだ。」以前ベルリンで暮らした頃に読んだ新聞の記事を思い出します。

オラーニエンブルク通りを東にしばらく進むと黄金のドームを^{いただ}戴く巨大なシナゴーク(ユダヤ教会)の前に出ます。1938年のいわゆる「水晶の夜」²⁾にナチスの焼き討ちにあったこのシナゴークは、50年あまり経ってようやく再建されました。再建されたばかりのシナゴークを、以前見物に行ったことを思い出します。建物はいま教会ではなく博物館として使われていて、観光客の姿を多く見ました。そして以前同様自動小銃を肩にかけた警備の警官の姿も。極右の連中、そして反イスラエルと結びついたテロの^{かっこう}恰好の標的となりかねませんか

ら。

シナゴグの先の角を左に曲がるとかつてのユダヤ人地区に入ります。戦争の傷跡をとりわけ深く残すこの一帯は、私にとって特に印象深い場所でした。漆喰^{しっくい}の剥げ落ちたぼろぼろの外壁、薄汚いペンキスプレーの落書き、そして大戦中の銃撃戦による無数の弾痕。しかしこのあたりも今はきれいに修復され、蜂の巣状の弾痕を残す建物はもう一つ二つしかありません。それもまもなく消えていくのでしょうか。近くにあるかつてのユダヤ人墓地　これもナチスによって破壊されました　は静かな公園となり、若い男女が数人芝生の上に寝そべり、あるいは腰をおろして秋に向かう午後の木漏れ日を楽しんでいました。周辺には以前、爆撃で半ば以上崩壊した建物がいくつかあったのですが、それもすっかり姿を消しています。その代わりに現れたのはパリ風あるいはニューヨーク風のレストランやカフェ。スターバックスでコーヒーを啜りながら私は、すっかり変貌した町の姿を前に重い気分で見ました。

過去と現在と未来とがそれぞれに生々しい姿をさらけ出して並存する街。これが私にとってベルリンの最大の魅力でした。あちこちに広がる巨大な工事現場は将来そこに現れる未来的空間を予想させるとともに、工事現場の混沌は混沌としたベルリンの街それ自体を象徴するかのように見えました。犯罪、麻薬、売春、富と貧困、民族的・宗教的差別と対立、そして東西両ドイツ人の軋轢^{あつれき}。世界の抱えるさまざまな矛盾がこの街に凝縮して存在する。この印象は今も変わりません。ただし、以前はほとんど姿を見ることのなかった「未来的空間」がたとえばポツダム広場の高層ビル街として可視的現実となってくると、そうした「未来」に私は愛着を覚えられそうにない気がしてきます。無機能的な、世界のどこにでもありそうな「未来」空間。そして、そうした未来の出現する代償として「過去」がすさまじい勢いで姿を消していく。かつて住んでいたアパート群の非人間的空間構造が変えようもなく残っているのを見て、私は一抹の安堵を覚えたのでした。

もっとも、ベルリンが、あるいはドイツ人が過去をすべて忘れ去ろうとしているわけではありません。ポツダム広場から有名なブランデンブルク門までの

道の途中に、鉄柵に囲われた広い空き地があります。第二次大戦中のホロコースト（大量虐殺）の犠牲となったユダヤ人のための記念碑をここに築くことが、何年もの議論の末ようやく決まりました。トルコ人地区として有名なクロイツベルクには、市内にいくつもある記念碑や博物館に加えて、最近新たにユダヤ



ユダヤ博物館

博物館が開設されました。これを見ることも、今回の旅の重要な目的でした。金属的な外壁に深い亀裂が何本も走る博物館のなかに入ると、地下の通路は途中で3本に分かれます。1本は長い階段を昇って展示室へ。他の2本のうち1本は「亡命者の道」で、その突き当たりから外に出ると、四角いコンクリートの柱が数十本林立する庭に入ります。柱のあいだの狭い通路を歩く者は高い柱によって視界をさえぎられます。祖国を離れた者の方向喪失感を表現しようとしたのだそうです。残る1本の通路は「ホロコーストの道」で、突き当たりの重いドアを開くと最上階まで吹き抜けの三角柱の暗い部屋に入ります。三角柱の一边のはるか上の位置にわずかな隙間があり、そこからだけ外光が差し込んできます。ひとつの壁には鉄製の梯子はしごのようなものがかけられていますが、位置が高すぎてそれに取り付くことはできません。逃げ道のない空間。館内の展示はヨーロッパのユダヤ人の歴史を古代から現代まで追うもので、これも充実しています。しかし、博物館はやはり博物館でしかない。少なくとも私には、銃撃戦の跡を残すあの壁ほどの生々しさを伝えてはくれませんでした。

記念碑を作り博物館を作る、そのことによって人は過去を過去のうちにお蔵入りにしてしまうのではないか。先にふれたブランデンブルク門そばのユダヤ人記念碑建設をめくり、記念碑の設計内容とは別に、ドイツではこのような議論が闘わされました。戦争の加害者としての立場からする博物館等をほとんど

もたない日本と比べればはるかに次元が高いといわざるをえないのですが、にもかかわらず確かに、博物館入りした時点で過去がその生々しさを大きく減じることが否定できません。もっとも、それでは銃撃戦や爆撃の跡をそのままおいておくことがはたして可能かどうか。

そもそもこうした傷跡が戦後50年以上もの間多く残っていたのは、ベルリンという街のたどった歴史に規定された特異な現象というべきでしょう。敗戦後、崩れ去ったドイツ帝国の首都ベルリンは米・英・仏・ソ4カ国の占領下におかれ、やがてソ連占領地域とそれ以外の東西二つに分断されます。東側は1949年に成立したドイツ民主共和国（東ドイツ）の首都となり、一方西ベルリンは、同年成立したドイツ連邦共和国（西ドイツ）に属する東ドイツ領内の陸の孤島として、西ドイツのみならず西側世界全体の橋頭堡の役割を担い、米ソ冷戦の波頭に立ちます。両ドイツ政府はそれぞれに属するベルリンの都市開発を進めますが、しかし、とくに東西ベルリンの境界地域は荒廃したまま、そこに「壁」による「死の空間」が出現することになります。1990年のドイツ統一後、ようやく転機が訪れます。1994年に私がベルリンに行ったとき、分断によって廃駅となっていた地下鉄のポツダム広場駅がようやく復活したところでしたが、降り立って気味が悪いと感じるほど荒れたままでした。それが今は高層ビル街への入り口として、モダンな地下街が駅につながっています。統一によってベルリンはようやく正常な発展をとげうようになったのです。廃墟の消失はその当然の帰結でしかありません。

「現実としては、過去は無情にも自らを失っていく。」スペインの哲学者・歴史家ディエス・デル・コラルはこう述べました。ただしすぐに続けて「しかし断じて無に帰していくのではない」とも。³⁾そう、無には帰していかない。それどころかわれわれの「この唯一無二の生は、現在の生ではあるが、しかしこの人生として存在しているところのもの、すなわちその形態や独自の内容は、過去によって初めて可能なものとなってきたのである」⁴⁾。しかし同時に私は、ドイツの哲学者ヴァルター・ベンヤミンの「歴史の天使」についてのつぎのようなイメージも思い起こします。「かれの眼は大きく見ひらかれていて、口は

ひらき、翼は拡げられている。〔……〕かれは顔を過去に向けている。ぼくらであれば事件の連鎖を眺めるところに、かれはただカタストローフのみを見る。そのカタストローフは、やすみなく廃墟の上に廃墟を積みかさねて、それをかれの鼻さきへつきつけてくるのだ。たぶんかれはそこに滞留して、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せあつめて組みたてたいのだろうが、しかし楽園から吹いてくる強風がかれの翼にはらまれるばかりか、その風のいきおいがはげしいので、かれはもう翼を閉じることができない。強風は天使を、かれが背中を向けている未来のほうへ、不可抗的に運んでゆく。その一方ではかれの眼前の廃墟の山が、天に届くばかりになる。ぼくらが進歩と呼ぶものはこの強風なのだ。⁵⁾この強風のなかでユダヤ系ドイツ人であるベンヤミンは、1940年9月、亡命先のパリからさらにアメリカに逃れようとする途上、フランス・スペイン国境のある町で自ら命を絶ちます。

過去はわれわれの生を可能にするものであると同時にわれわれを無残に蹂躪^{じゅうりゅう}するものでもあります。コラルのいうように過去は 眼前の現在もまた時々刻々姿を消していきます。ベルリンの戦禍の跡の消えていくのを嘆くのは詮無いことでしょう。しかし過去を忘却のままに任せればわれわれは、無防備に歴史の強風に翻弄^{ほんろう}されるばかりか、未来にふみだすわれわれの足取りもおぼつかないものとなります。未来への一步は、過去が可能にする現在の生の上にふみだされるしかないのですから。

ベルリンは人を思考に誘います。数年後、この街をまた訪ねてみたいと思います。

注

- 1) E. ローターズ編『ベルリン 1910-1933』岩波書店、1995年、p. 12 より引用。
なお、本稿に関連して、拙稿「戦後50年目のベルリン」『情況』1996年3月号を参照されたい。
- 2) 1938年11月9日から10日にかけての夜、ドイツ各地で多数のユダヤ人商店やシナゴークなどが襲撃された事件。割られた窓ガラスが道に散乱する様子から「水晶の夜」と呼ばれる。ちなみに11月9日という日付は、1918年にヴァイマール共

和国の成立が宣言され、1989年にはベルリンの壁が破れたドイツ人にとって運命的とも言うべき日付である。

- 3) コラール『過去と現在』未来社、1969年、p. 28.
- 4) 同上。
- 5) 「歴史の概念について」ベンヤミン『ボードレール 他5篇』岩波文庫、1994年所収、p. 335-336.